

資料紹介

京都名所俯瞰図（1） —江戸時代の洛中洛外名所図—

鋤柄 俊夫

本学部が所蔵する「京都名所俯瞰図」は、大きさが横 83.3cm、縦 45.7cmで、西山上空から京都市中と東山を俯瞰した紙本で著色の図である。

横山・山原図の「花洛一覽図」（角屋保存会）を題材にしたと思われる江戸時代の洛中洛外名所図であるが、構成や描写に独自の地図性もみとれる資料でもあるため、その内容について詳しく検討をしてみたい。

最初に、描かれている範囲を確認すれば、右手奥に平等院と宇治橋が描かれ、その手前に御香宮と『都名所図会』の「伏見船場」と思われる伏見の港が見える。そのまま宇治川を下れば巨椋池が

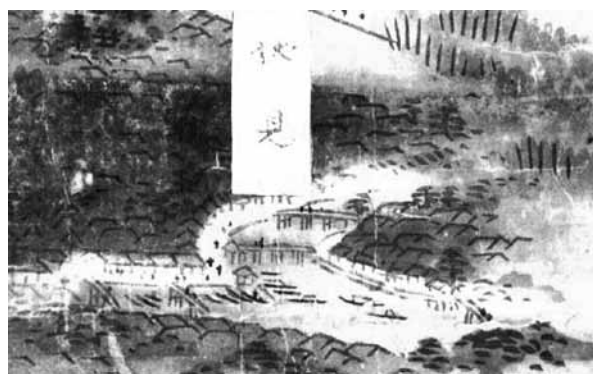


図 1 伏見港

視界に入ってくることになるが、その部分は雲で隠され、右手前には、水車の回る淀城が建ち男山と天王山に挟まれた淀川が流れる。

『JK 版日本歴史地名大系』によれば、この水車は揚水用の大水車で、淀城の北と西の2ヵ所に設けられていた。ただし、その起源は天正 14 年（1586）にさかのぼり、天正 16 年におこなわれた秀吉の淀城修築より古い歴史を持つ。また狂言「靱猿」に登場する「淀の川瀬の水車、誰を待つ



図 2 淀城の水車

やらくるくると、くるくると」が、この水車とされる。

その右手前に位置するのが、男山の石清水八幡宮と、対岸の宝積寺である。

天王山南斜面の中腹に立地する宝積寺は、真言宗智山派で木造十一面観音立像を本尊とする。行基の開創伝承を持ち、長保 5 年（1003）に入宋した寂照が、当寺で法華八講を修した記録がある。

鎌倉時代を通じて庶民信仰の場となり、室町時代はやや衰退するが、天正 7 年（1579）には織田信長が当寺に滞在して石清水八幡宮の修造を指示し、羽柴秀吉が築城した山崎城が「財（宝）寺城」とも呼ばれたように、戦国末期には大いに注目された。

なお図に描かれている総高約 19.5m の三重塔は、様式から桃山時代と考えられており、塔前に天正 12 年（1584）銘の石灯笼が一对ある。

男山の地は平安京の裏鬼門にあたる。石清水八幡宮は、言うまでもなくそれを鎮める象徴であり、図には山頂に建ち並ぶ社が描かれている。

一方、本図の左手を見れば、その奥にそびえているのが比叡山と西塔谷で、手前には愛宕山と高尾が描かれている。旧山城国と旧丹波国との境界

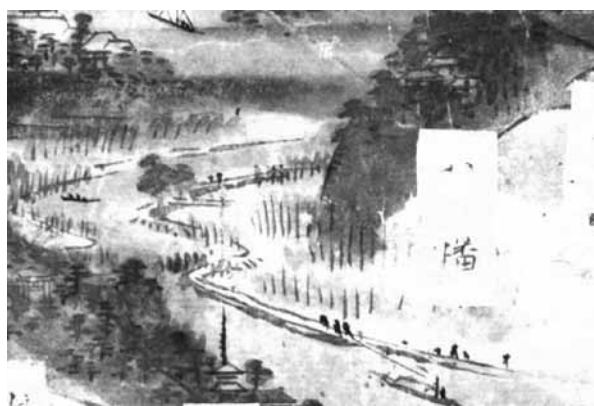


図3 石清水八幡宮

をなす海拔 924m の愛宕山は、古くから修験者の行場とされ、『山域名勝志』所引の白雲寺縁起などから王城镇護の聖地とされている。一方、右手奥に戻れば、宇治は山崎と共に奈良時代またはそれ以前にさかのぼる時代の橋で有名な地である。

その意味で、宇治と男山と愛宕山と比叡山を四至とした本図は、平安時代以来の京都の境界意識を踏襲したものと言える。

絵にしたがい、西から洛中に進んでみたい。

本図の右手前に描かれている天王山に戻り西山を北へ向かえば、善峰寺と松尾社を経て、桂川を望み桜の咲く嵐山に着く。

渡月橋を渡ると嵯峨野である。貼紙は二尊院と嵯峨野釈迦堂のみであるが、目をこらせば天竜寺と思われる堂舎をはじめとして、多くの家並みが桂川沿いから東へのびている。

この東へのびる家並みの先を見ると、三方正面の鳥居が描かれている。この鳥居は、京都三鳥居の一とされる三柱鳥居であるため、ここが秦氏ゆかりの木嶋神社境内に鎮座する養蚕神社、通称蚕の社の鳥居であることがわかる。

またその手前には堂舎が描かれており、確定はできないが、養蚕神社との位置関係で言えば広隆寺が妥当となる。



図4 養蚕神社

嵯峨野釈迦堂に戻り東へ向かえば、広沢池が見え、その先の細い山越の道をゆけば、御室の桜が迎えてくれる。現在、船岡山から西を望むと、山の端に仁和寺の塔が見えるが、本図にもその塔が描かれている。また仁和寺の北に設けられている八十八カ所巡りも克明に描かれている。

仁和寺の南は双ヶ岡で、その東が妙心寺である。双ヶ岡の表現はあまり明確ではないが、妙心寺の北門に面する一条通には細かな家並みが描かれており、門前の賑わいが想像できる。

仁和寺から衣笠山の麓をめぐる金閣寺へ向かう。貼紙は無いが途中で龍安寺があるはずと目をこらすと、衣笠山の向こうに徳大寺家由来の鏡容池が見え、さらにその先に等持院が見える。



図5 龍安寺

現在の京都観光スポットを代表する金閣寺は、舍利殿と石不動に加え、その南の鏡湖池も詳しく描かれている。なかでも葦原島と呼ばれる中島の先には、現在は存在しない橋が池に架かっており、金閣寺の歴史を検討する上で注目される。



図6 金閣寺

金閣寺から東へ向かうと平野神社であるが、その先で画面のほぼ中央を左右に長くのびているのが豊臣秀吉の築いた「土居藪筋」である。

御土居は、天正 19 年 (1591) に秀吉が京都の中心部を囲んで築いた土塁である。全長は約 23 km で、良好に現存する土塁の規模は、基底部幅が 18m、高さが 4.7m である。範囲は、東が鴨川、

西はおおむね天神川に沿い、南は東寺で北は北山通のやや北を巡っており、図にも北辺以外の描写を見ることができる。また『三藐院記』などより、その上に竹が植えられていたことがわかる。

江戸時代に入ると、鴨川沿いを中心に徐々に姿を消しはじめるが、寛文9年(1669)には角倉与一が土居敷支配に任命され、また「御土居敷竹」は入札で払下げがおこなわれ、京中の竹仲間が参加するなど、その保全もはかられたと言う。

御土居を越えてすぐに目に入るのが二条城と北野天満宮であり、その北には船岡山と大徳寺と今宮神社が並ぶ。

北野天満宮で注意する点は塔の存在である。

森浩一氏の『京都の歴史を足元からさぐる』[北野・紫野・洛中の巻]に学べば、明治の神仏分離令までは神仏の習合が普通で、北野天満宮においても室町時代の「北野社絵図」を見れば、境内の

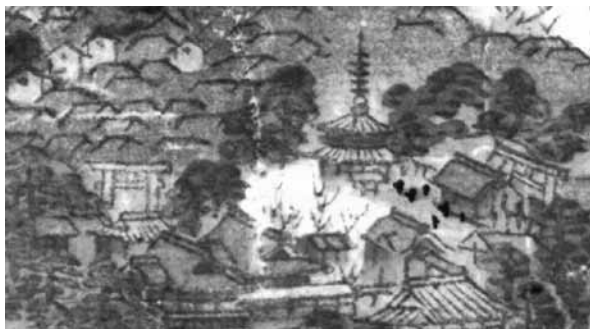


図7 北野天満宮と西陣の土蔵

南東隅に二層の多宝塔が建ち、本殿の東には鐘楼があったと言う。このうち鐘楼は、八坂の大雲寺に移築され、鐘は天津市の正休寺にあると言うが、本図に描かれた塔は、その事実を示す証人である。

なお北野天満宮の東鳥居の先の家並みの中に4棟の土蔵が見える。東鳥居の先は五辻通沿いの西陣の地である。これらの土蔵は、ほかではほとんど見られないため、繁栄する上京の表現と読める



図8 火の見櫓

だろう。

北野天満宮の南東には二条城が描かれているが、その北と西に火の見櫓が建っている。

本図のほぼ中央で、ひときわ目立つ、この火の見櫓であるが、実は不明な点が多い。

近世京都における有名な火の見櫓は、京都所司代屋敷と京都代官屋敷にあった。

京都所司代は西日本支配の最高権限を有した江戸幕府の行政機関で、上屋敷が二条城北御門前の現藁屋町にあり、二条城北西の現主税町北側から中務町にかけては、千本屋敷と呼ばれた広い敷地の下屋敷があった。近世の絵図には、この下屋敷内の千本通際に火の見櫓が描かれている。

一方、京都代官屋敷は、現在の西ノ京小堀町付近にあり、千本通を隔てた西側には、その下屋敷があったと言う。そしてこの屋敷に六角の火の見櫓があり、人々に親しまれたとされる。

問題はこれらの火の見櫓と本図の火の見櫓の関係である。ポイントは、ふたつの火の見櫓の位置関係と本図における千本通の位置となる。

まず、本図の火の見櫓の位置関係であるが、二条城に対して、北と北西に描かれている。そのためこれを屋敷の位置関係と対応させれば、北が京都所司代屋敷で北西が京都代官屋敷になる。

一方、本図における千本通を探すと、二条城の南に描かれている島原のすぐ手前に、南北にのびる道があり、そこに「千本通」の貼紙がある。島原は現在の嵯峨野線丹波口東に位置しており、本図の「千本通」と矛盾しない。また二条城と島原のほぼ中間に堂舎が描かれているが、そのすぐ北から東へのびる道の先が四条通につながっているようにみえるため、この堂舎を壬生寺とすれば、やはり本図の「千本通」と矛盾しない。

そこで、この道を千本通として火の見櫓との関係を見れば、この道は二条城の西あたりで家並みに隠れて見えなくなり、その少し北で、築地堀に

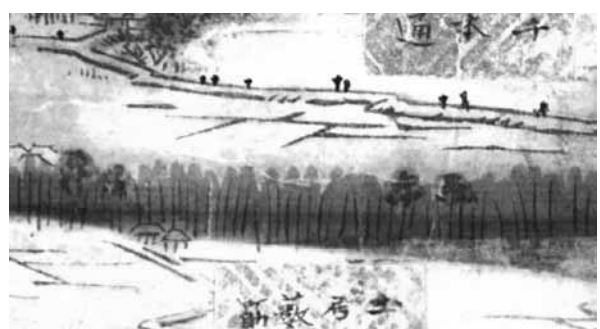


図9 千本通と土居敷筋

囲まれた屋敷内の火の見櫓と接するように見える。ところで近世の絵図によれば、千本通の西側に家並みが描かれる南限は、二条城西にあった京都所司代の御組屋敷で、その東に所司代の千本屋敷が位置するため、千本通との関係で言えば、本図で二条城に近い火の見櫓は千本屋敷を指すことになる。しかしこの場合、北側の火の見櫓の所属が不明となってしまう。

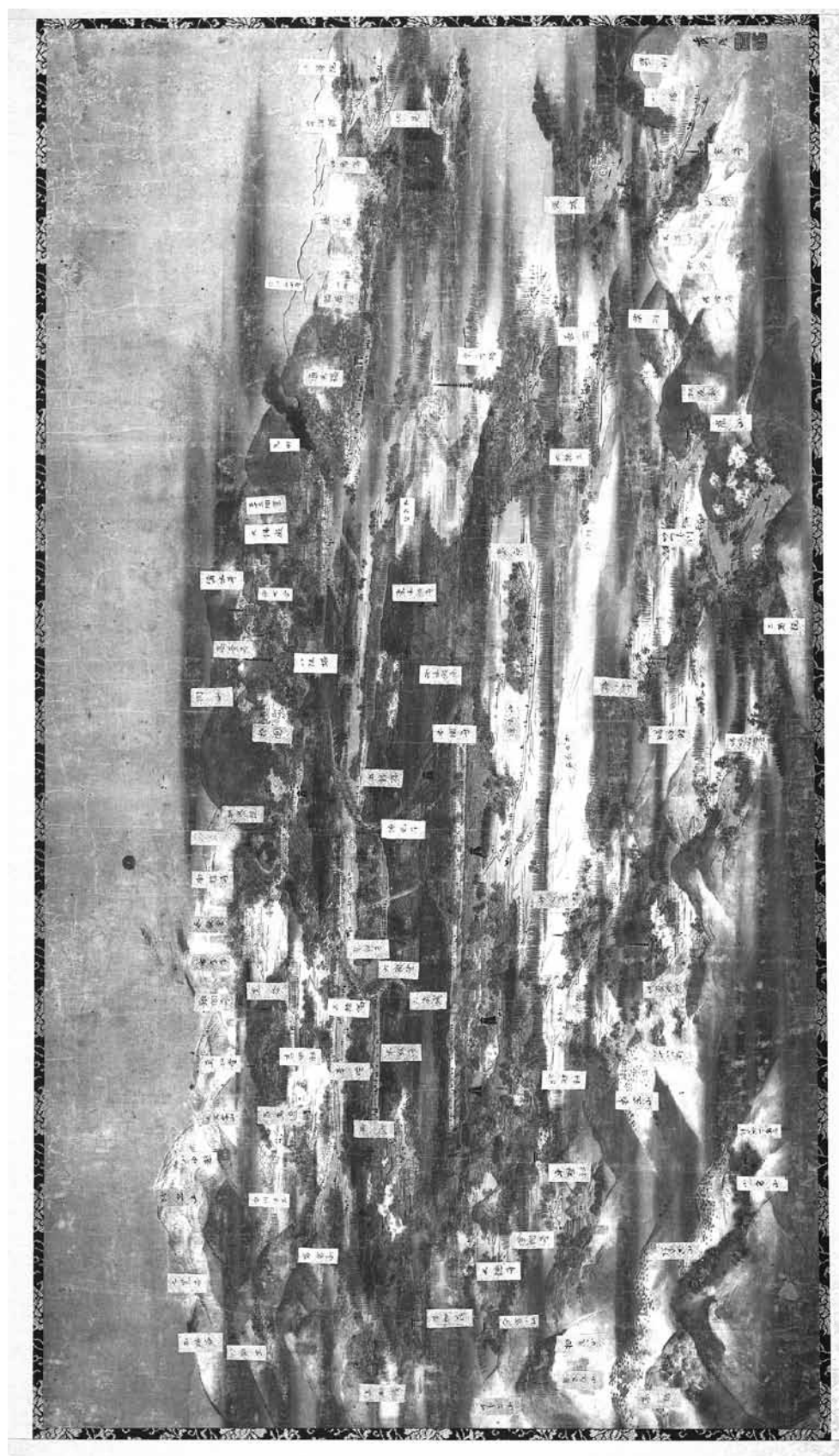
先に紹介したように、本図の類例は、絹本著色の「京都一望図」(伝円山応挙筆)に刺激を受けて刊行された横山崋山原図の「花洛一覽図」(角屋保存会)にみられる。ただし「京都一望図」も「花洛一覽図」も、二条城の近くで描いている火の見櫓は、所司代屋敷の1基のみである。

これまで見てきたように、本図の描写は詳細であり、地図性においても矛盾が少ない。

本図に描かれた火の見櫓は単なる誤謬なのであろうか。検討を続けたい。

参考文献

- 京都国立博物館 1997『洛中洛外図 都の形象』淡交社
森浩一 2008『京都の歴史を足元からさぐる』[北野・紫野・洛中の巻] 学生社
平凡社 2013『JK 版日本歴史地名大系』



京都名所俯瞰図 (本学部蔵)